

大内青巒編輯
熱海獨案内

全

3
41



始



時32
57

仙源

長三洲先生題首
寫田三郎先生序文
大内青巒先生著述

熱海獨案内全

遊仙洞上梓

W 236521

22



序
凡文章名教ニ補ナキ者ハ必ズシモ作ラ

可ナリト是レ浮誇虚飾ノ文ニ精神ヲ耗
弊ヲ戒メタル者ナリ此義ヤ獨名教ト文
關係ニ止マラズ夫レ文章ノ躰多シト雖
凡其用ヲ極言スレバ言語ノ記載ニ外ナラズ文
章ノ實ヲ失ヘル者ハ猶ホ言語ノ實ヲ失ヘルガ
ゴトシ秀美ナリト雖凡尚ホ何ノ益アラシヤ然
レ凡文ニ調格ヲ重ンズル者アリ實用ヲ主トス
ル者アリ夫ノ紀行地理ノ書ノ如キハ實用ヲ主

東國館蔵書



有
路

三洲生題首



トスルノ文ト謂フベシ我國支那ノ餘弊ヲ承ケ
一切ノ文章語句ノ調格ヲ主トシテ事實ノ如何
之ニ次ク故ニ紀行ノ文大抵詩章ノ體ヲ帶ブ道
程ヲ記スレバ曰ク約數十里高山ニハ則チ天ヲ
突クト云ヒ大河ニハ則チ千里ノ長江ト云フ一
讀シテ壯快ノ念ヲ生スルカ如シト雖此之ヲ以
テ行旅ノ便ニ供セント欲スレバ則チ道路ノ遠
近知ル可カラズ山川ノ位置辨ズ可カラズシテ
巨匠ノ傑作モ只坊間一篇ノ案内記ニ如カザル
ナリ且其書大抵漢文ヲ用フ之ヲ文詞ヲ銜フ者

トセバ則チ可ナリ之ヲ實用ノ書ト云ンハ則チ
甚ダ遠シ獨リ貝原翁ノ諸遊記ハ然ラズ其文詞
簡淡ニシテ要事ヲ縷舉ス能ク流弊ヲ脱シタル
者ト謂フ可シ其京城勝覽ノ自序ニ曰ク「この都
の内外の名區櫛のごとくよよ比ひなり陳述ちんじゆ碁きの如
くよ布ふることを京なる人だよ知らざるも多か
りいもんやいなかよりはじめて来れる人いま
だ名勝のある所を去らでゆく〜空くわしく過あな
んもうらみおほかるべしかゝる人よ去らしめ
んれうよ日々よ遊觀すべきほどのかぎりを爲

し四方をまかちて其名を記し其のついでをつ
らね侍りぬこれをたづさへてその所にゆき其
名をたづねむ知らむして空しく過るのうらみ
なかるべし」ト嗚呼翁ノ心ヲ用フルコト此ノ如
シ其書後世ニ存シテ永ク衆人ニ傳誦セラルハ
ハ決シテ偶然ニアラザルナリ之ヲ空詩浮文ニ
精神ヲ耗シテ毫モ世ニ益ナキ者ニ比スルニ其
得失果シテ如何ゾヤ大内君熱海獨案内ヲ著ハ
ス文解シ易クシテ事皆實ヲ記ス之ヲ携ヘテ熱
海ニ遊バシ其地一切ノ事皆指掌スルヲ得テ初

往ノ客モ亦其景迹ヲ窺ハズシテ徒ニ歸ルノ憾
ナカルベシ予君ガ用意ノ深且切ナルヲ悦ビ鄙
説ヲ卷端ニ弁シテ以テ蕪辭ヲ徵セラルハノ責
ヲ塞グト云フ

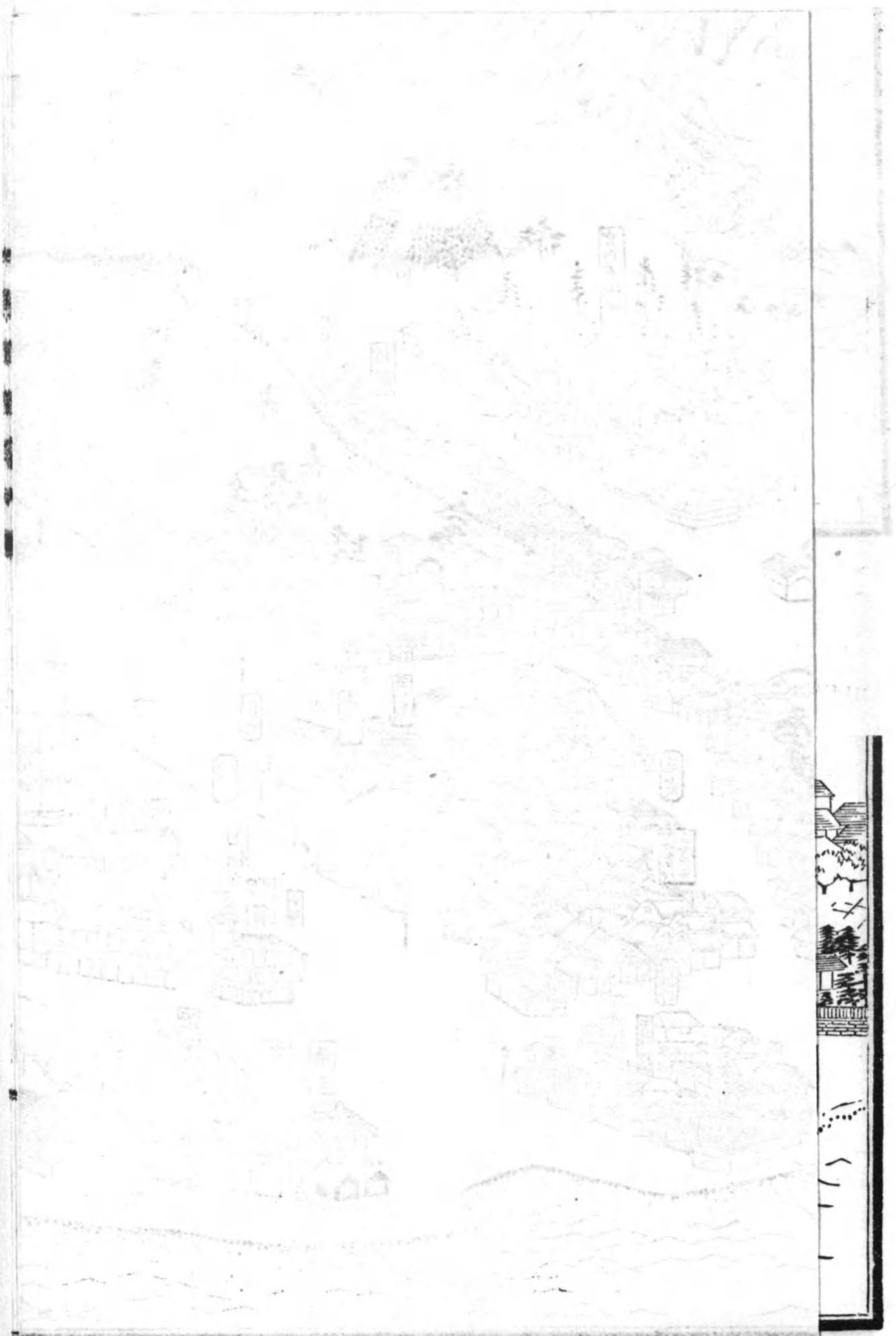
明治十八年八月

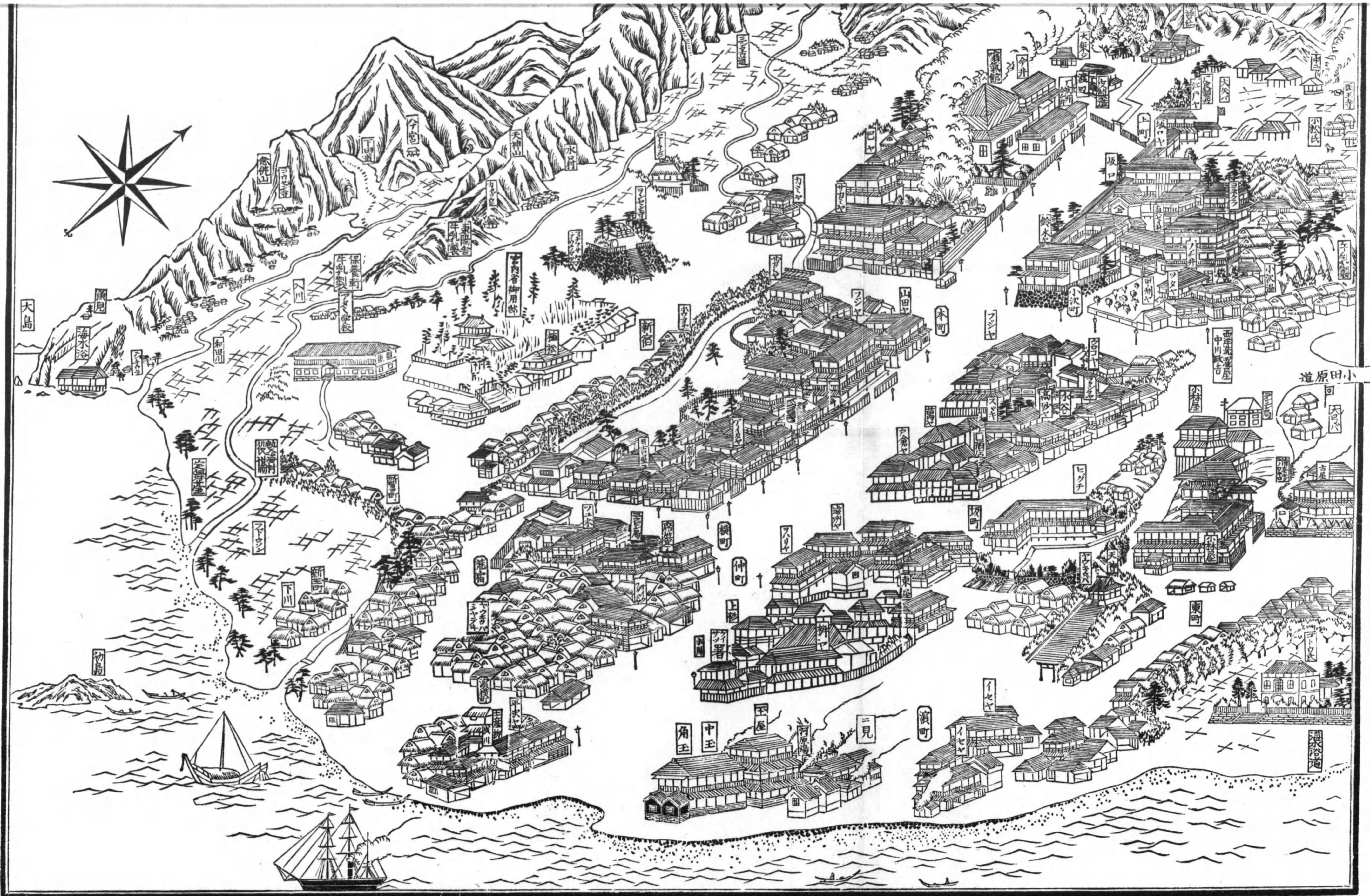
島田三郎撰

延保十六年八月

日田三浦

延保十六年八月
日田三浦
熱海獵案內序





大島

海木

保善

牛乳製菓

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

道原田小

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

保善

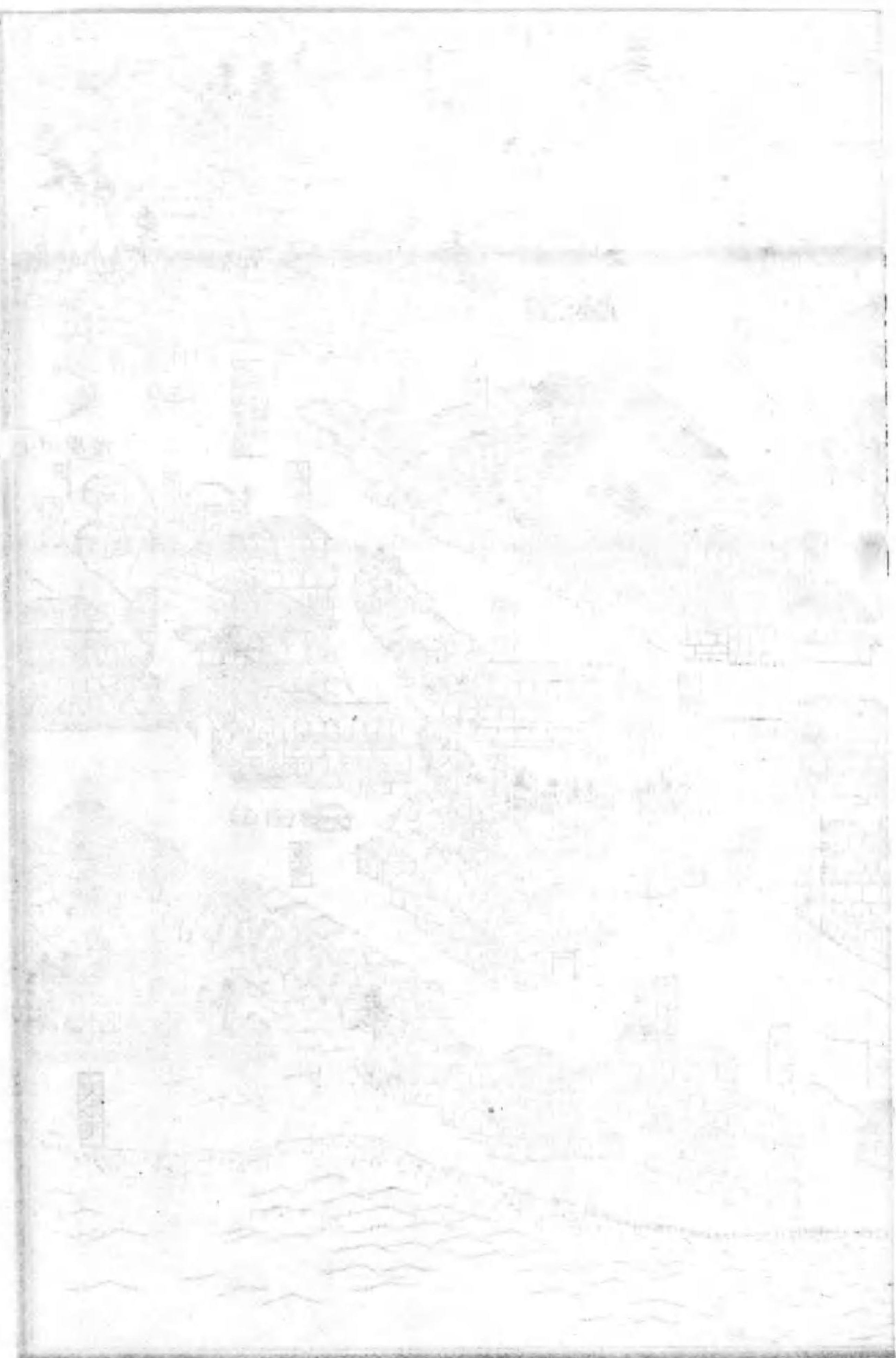
保善

保善

保善

保善

保善



熱海獨案内 目次

○地理 伊豆 熱海 湯河原 和田 水口

○温泉 温泉湧出の來歴 五大湯 清左衛門湯

○小林屋の湯 古屋の湯 小澤の湯 阪本屋の

湯 風呂の湯 高砂屋の湯 水の湯 河原湯

○榊屋の湯 二見の湯 伊勢屋の湯 吾妻屋

の湯 中玉屋の湯 隱居玉屋の湯 左治郎の

湯 樋口の湯 勘兵衛湯 尾張屋の湯 野中

の湯 温泉性質 主治効用 浴法及ひ内服法

○鱗屋の湯

○湯戸 浴室 噲瀛館 席 婢 食料

○山川名勝 上野山 和田山 念佛山魚見 入

山 天神山 丸山 瀦溜池 絲川 初川 和

田川 業平井 耶須澤瀑布 錦浦觀音 日金

山十國 伊豆山古々井 網代港根越 初島 鷓

鷓石 一杯水

○社寺并行殿舊墟 湯前神社 來宮 和田八幡

○今宮 天神祠 紀僧正祠真濟僧 温泉寺藤房

○興禪寺雲居國 海藏寺 醫王寺 潮音寺

大乘寺 誓欣院 御殿跡

○產物 樟材什器 雁皮紙 壁土 赤石脂 鹽

温石 煉瓦石 乾魚

以上

○ 熱海 獨案内 東京 諸々 居士 輯
○ 熱海 獨案内 東京 諸々 居士 輯
○ 熱海 獨案内 東京 諸々 居士 輯
○ 熱海 獨案内 東京 諸々 居士 輯
○ 熱海 獨案内 東京 諸々 居士 輯
○ 熱海 獨案内 東京 諸々 居士 輯
○ 熱海 獨案内 東京 諸々 居士 輯
○ 熱海 獨案内 東京 諸々 居士 輯
○ 熱海 獨案内 東京 諸々 居士 輯
○ 熱海 獨案内 東京 諸々 居士 輯

熱海獨案内



地理

伊豆の國は東海道の東南隅に突出し西北に富士山を受け
北に箱根の嶮を負ひ東南西の三面は皆大洋をめぐらし國
の形勢斜にして且つ細く周回六十餘里とす之を君澤田方
加茂那賀の四郡に分ち國中甚だ高山多く殊に天城眞城達
磨日金伊豆等の諸山其脈互に相聯絡し山溪海岸處々に温
泉湧出し其數ほとんど二十餘ヶ所に及ぶ即ち古奈修禪寺
船原吉奈湯ヶ島土肥二條手石蓮臺寺横川湯ヶ野小鍋奈良
本松原畑毛大澤峰伊豆山熱海等これあり然れば此國を伊

熱海獨案内

豆と稱するは湯出の國の約言にして本邦温泉の出る所頗
 ぶる多しと雖とも實に此國を以て第一とあす而して熱海
 の泉その名尤も世にあらはれ治病の効も亦著るしといふ
 ○熱海郷は豆州一國の東北隅伊豆山の南日金山の東麓に
 あり加茂郡葛見の庄に係る昔は湯瓦原和田水口三ヶ村を
 合せ田額六百四十三石二斗九升九合と稱し葦山代官の治
 に屬し海山の賦は皆伊豆神社の社領たり而して今は耕地
 九十町餘宅地十町餘山林一千四百二拾六町餘民戸五百五
 十餘戸すべて静岡縣の管轄に屬す其地三方に山をめぐら
 し三冬と雖も北風及び西北風の暴烈を拒ぎ唯東南の一隅
 に蒼海を開き常に新鮮ある海風を受けるが故に其氣候温和

に去て夏冬ともに甚だ其寒熱を凌ぎ易とす正面海路三
 里をへたて初島を翠浪白波の間に望みそれより南十數里
 にあたり遙に大島を水天髣弗の際に見る北の方小田原驛
 を距ること七里餘其順路は伊豆山村門河村伊豆相摸の國界
なり昔伊豆山東
 明寺の大門こゝ吉濱村赤澤村江浦村根府川村昔は此村に關門
ありて旅人を警
 察し前後道路險隘或は海岸岩石磊落の間を歩し或は懸崖危峯を涉り
 行路甚だ困難ありしを近年官民協力して新道を開き車馬往來の不便
 を覺へざる米噲村石橋村治承四年八月源賴朝大場景親と戦ひ佐奈
田與一義忠及其從僕豊三の戦死せし處な
 り路傍に與早川村を経て小田原に達す西の方三島驛へ五里
 一の祠あり日金山の峰熱海峠此路また近年車道を開
きて往來し易からしむを踰え輕井澤驛之
 澤平井是より北條に
赴く岐路あり大土肥八溝大場を経て三島に至るを順
 路とす又日金山の絶頂十國峠を
踰て箱根に至る道あり南の方伊東港に至る行程五里

和^わ田^た多^た賀^が新^{しん}浦^の中^の野^の小^の山^の和^わ田^た木^き 是より網代港に至る岐路あり 宇^う佐^さ美^みを^を經^へて

至^しる小^こ富^ふ士^し山^{さん} 江浦伊豆山日金山等より之を望めば其景尤もよろし 亭^{てい}子^し島^{じま}等^らの勝^{かち}景^{けい}あり

此島に洞あり昔源頼家和田胤長に命して其洞源を探らむむ 又^{また}温^{おん}泉^{せん}

るに遂に其奥を窮むること能はさりし由東鑑に見へたり 湧^わ出^しして浴^{よく}客^{かく}頗^たる多^{おほ}し 温泉の側に寺あり寺中に古池あり怪魚を産すと云ふ

○湯^ゆ瓦^が原^{はら}村^{むら} また磯山の里と稱せしことあり然るに今は兩

名^な皆^{みな}稱^なせず 今を距る三百五十年前まで湯瓦原村の稱ありしこと永

正十八年湯前神社造營の棟札に依て知らる此札今富士

屋^や喜^ぎ右^{みぎ}衛^ゑ門^{もん}の單^{だん}に熱^{あつ}海^{かい}村^{むら}と稱^なし和^わ田^た水^{みづ}口^{ぐち}二^に村^{むら}を屬^{ぞく}里^りとす是

所^{ところ}藏^{ざう}に係^かる 即^{すなは}ち温^{おん}泉^{せん}湧^わ出^しの本^{ほん}里^りなり街^{まち}區^く十^{じゅう}一^{いち}に分^わつ本^{ほん}町^{ちやう}中^{なかつ}町^{ちやう}濱^{はま}町^{ちやう}新^{しん}

宿^{しゆく}荒^{あらい}宿^{しゆく}横^{よこ}町^{ちやう}新^{しん}横^{よこ}町^{ちやう}東^{とう}阪^{はん}町^{ちやう}小^こ澤^{さわ}崎^{さき}見^み町^{ちやう}上^{かみ}宿^{しゆく}野^の中^{なかつ}これなり 此他

八^{はち}町^{ちやう}念^{ねん}佛^{ぶつ}山^{さん}の麓^{ふもと}にあり民^{たみ}戸^こ凡^{およ}六^む十^{じゅう}餘^ご農^{のう}夫^ふ漁^{りょ}者^{しや}雜^ざ居^きせり其

湯瓦原村

温泉

西北五六町入山に傍^{そば}て人家^{にんが}凡^{およ}十^{じゅう}三^{さん}四^し戸^こあるを水^{みづ}口^{ぐち}村^{むら}とす人民^{にんじん}みな耕^{かう}樵^{しやう}を兼^かぬ而^{して}本^{ほん}里^りは民^{たみ}戸^こ凡^{およ}三^{さん}百^{ひゃく}七^{しち}八^{はち}十^{じゅう}戸^こ農^{のう}工^{こう}商^{しやう}買^{かい}漁^{りょ}夫^ふ樵^{しやう}者^{しや}軒^{けん}を聯^{れん}ねて雜^ざ居^きし警^{けい}察^{さつ}分^{ぶん}署^{しよ}あり電^{でん}信^{しん}局^{きよく}あり郵^{ゆう}便^{べん}局^{きよく}あり通^{つう}運^{えん}會^{かい}社^{しゃ}の分^{ぶん}店^{てん}あり毎^{まい}月^{げつ}數^{すう}回^{かい}東^{とう}京^{きやう}招^{しやう}津^つの間^まを往^{わう}復^{ふく}する瀛^{えい}船^{せん}の寄^よ港^{かう}するあり屠^と牛^{ぎゅう}場^{ばう}あり洋^{やう}食^{しき}店^{てん}あり玉^{たま}突^つ場^{ばう}あり楊^{やう}弓^{きやう}店^{てん}あり大^{だい}弓^{きやう}場^{ばう}あり稍^{しやう}や小^{せう}都^と會^{かい}の鉢^{へつ}裁^{さい}をあせり

熱海編案内

しめたまふ此時始めて此海中に熱湯沸出して魚鱗介甲み
 お爛死するを發見せりと准后親房の記に伊豆風土記を引
 て云く人皇四十四代元正天皇養老年間開基すと而して其
 説また未だ詳かならず其後天平勝寶元年己丑箱根山金剛
 王院第四祖万卷上人上人洛陽の人沙彌智仁の子嘗て方廣經一万余讀誦滿足す故に世人呼て万卷上人といふ
 此年常陸鹿島の神宮寺を建つ弘仁七年嵯峨天皇の詔に應じ上洛する
 の途中三州楊那郡に至り俄に遷化す世壽七十九歳箱根桑原村に葬む
 ると斯る靈湯の空しく海中に流散するを惜み且つ鱗介の
 之が爲に爛死するを慙れみ其泉脈を尋ねて之を山腹に移
 し開き其傍に少彦名神を祭り薬師佛を本地として湯前權
 現と稱せりと其泉は則ち大湯にして權現の社今に儼存す
 其後宇多天皇の寛平四年壬子紀の長谷雄當國の守として

温泉原地

此地に來り泉原を探らんと欲して深く地底を穿たしめし
 に數仞にして大石の面に數穴蓮房の如きものあるを見る
 のみ終に其源を究むること能はずして止むといふ此他種
 種の里説ありと雖ども多くは是れ妄誕不稽毫も記取する
 に足るものなし

○温泉原地 昔は七湯と稱す即ち大湯清左衛門湯小澤湯
 風呂の湯河原湯左治郎の湯野中の湯是あり而て今は處々
 に新泉湧出し即ち水の湯高砂屋の湯榭屋の湯勘兵衛湯樋
 口の湯古屋の湯小林屋の湯以上明治十一年の調査に係る小松の湯阪本屋
 の湯尾張屋の湯吾妻屋の湯伊勢屋の湯小川の湯隱居玉屋
 の湯中玉屋の湯丸登屋の湯初島屋の湯喜作の湯以上明治十
八年一月の

調査に係る蓋し明治十四年火災の後に探り得たる所の新泉なり然るに十八年三月此地再び大火災に罹れり故に此諸泉中又自ら隠顯變動せしことなるべし然れども今之を詳悉するに此諸泉中又自ら隠顯變動に違わらず且らく前日の調査に依るのみ 等すべて二十四ヶ所とある此他海岸田園到る處僅に深く之を穿ては温泉湧出せざるか他日更に幾泉を増加するも亦た知るべからず 眞に熱海の稱にそむかずと謂ふへし

大湯

○大湯 本町の上手西側に在り晝夜各々三回時を違へずして湧く但時ありて長湧することあり長湧は概ね十二時間とす例へば午前六時に湧出れば午後五時に至りて止む長湧止めは又十二時間長休す即ち午後六時より翌日午前五時に至るまで一滴をも出さざるが如し其後五七日間湧出の度量常ならず凡そ十日を過ぎて始めて常に復す其湧

出づるや初め疊石の間に於て蟹の目の如くに煮立ち漸く湧て遂に沸騰するに至りては恰も數箇の大唧筒を以て熱湯を灑ぎ出すが如く二三間へだりたる大石に熱湯を吐かくる其勢ひ響きは雷の如く蒸氣は雲の如く濺沫熱雨をかして近前すべからず故に四方數歩の地木柵を廻らして其危害を避く聞く支那國安州の潮泉は一日に三溢三蒸し撫州に一日三潮の泉あり蜀に六時泉あり滇中に百刻泉あり又瑞西國のエングストレープリーチン泉は毎年五月中旬より八月中旬まで毎日午後四時より午前八時を限りて湧出し伊太利國のウイラフリニアフ泉は一日三回時を定めて湧き佛蘭西のユルアンある或る温泉は毎七分時間に

流出すと然れども本邦に在りては熱海の外また此の如き温泉あるを聞かず蓋しウアルトン氏の温泉論に依れば此の如き温泉は必ず海邊に近くして數派も出路を開き其中の一箇は海中に口を開き満潮の時其泉口海水に壓塞られて流出づること能はず却て其水槽に流反り出路を他口に取て噴出すものにて此等の泉を名けて間泉と稱すといふ昔は温泉沸畢る比に至り甲蟲數千群り翔り遂に熱湯に混じて流れ去れり然るに文政の頃僧徳本東京駒込一其奇怪にして且つ恐れむべき状あるを以て梵法を修し浮屠を建しより此蟲再び出せずと云ふ里俗相傳へて靈感とあす予屢土地の古老の曾て其蟲を目撃せし者に就て其實を聞くを得たり其蟲里石俗礦蟲と稱する者に似て山海どもに其同類を見ざる者なりと云ふ

各湯

浮屠今尚ほ柵中にあり又其傍に石佛數軀を安置す僧觀譽東京淺草等の建る所といふ又英國ミニストルライトオノレ清徳寺主一ブルアルコツク氏万延元年七月此泉に浴し建る所の石碑あり數十言を勒す愛山海奇勝之餘建此石使後人知英人遊于此自吾輩始の語あり
 ○清左衛門湯 濱町の北裏天神山の後にあり晝夜つねに湧出て絶へず下皆相傳ふ昔し農民清左衛門此泉窟に陥りて死せり故に名くと○小林屋上の湯○同下の湯小林屋棟造○古屋の湯内田市郎等皆東町に在り各家の庭中に湧くを以て其名を得たり○小澤の湯 小澤に在り又平左衛門湯と稱す泉源三ヶ所一は澤口彌左衛門の宅地に湧き一は藤井

文次郎の庭中一は米倉三左衛門の庭中に出つ義堂の日工
 集義堂和尚は夢に曰く應安八年二月二十六日飯罷與諸子出
 窓國師の法嗣遊或村巷或僧舍有道人指一地曰嘗平左衛門肆虐爲害據此
 地造館臨誅屋陷地中人皆云活墜地獄至今呼曰平左衛門地
 獄と蓋し此泉窟をいふ歟又昔は此湯を法齋湯と稱せしと
 ありと云り而て今其由縁を詳にせず○鱗屋の湯○阪本屋
 の湯 阪町阪本屋水谷佐助の庭中に湧く○風呂の湯 阪
 町高砂屋大木圓藏の庭中に出つ○高砂屋の湯 阪町に在
 りもと若松屋の湯と稱す今は其地大木圓藏の有に販して
 其名を改む○水の湯 阪町福島屋松尾惣兵衛の庭中に出
 つ淡泊にえて盪氣なし謂ゆる中性泉なる者にえて相州箱

根野州日光肥後雜來等の鑛泉と性質を同ふすと云ふ泉質
功能
 等はへールツ氏の日本温泉獨案内に詳記せり○河原湯 東の濱邊に在りもと瓦の
 湯と稱す蓋し寛文六年小田原城主稲葉美濃守村民の爲に
 浴室を作り瓦を用ゐて其屋を葺けり故に瓦の湯と稱せし
 ありとぞ○柵屋の湯 昔は仲の湯と稱し濱町高橋某の宅
 地に出つ今其地柵屋山田藤吉の有に販せり故に此稱あり
 ○釜成屋の湯二見平
右衛門○伊勢屋の湯芥川九
右衛門○吾妻屋の湯鵜
澤
 莊 ○中玉屋の湯野田惣
兵衛○隱居玉屋の湯野田
惣兵衛等皆濱町に在
 り此邊明治十八年三月の火災に罹れ泉質功能すべて河原湯
 に同じと云ふ○左治郎の湯 仲町上杉助七の庭中に湧く
 此泉専ら眼病を治す故に目の湯と稱す又火傷を洗ふに奇

効ありと云ふ○樋口の湯 仲町に在りもと醫王寺の湯と
 稱す寺を大久保に移せし後樋口忠助此地を得て浴室を構
 ふ○勘兵衛湯○尾張屋の湯 野村庄皆仲町に在り○野中の
 湯 小澤の北上野山の麓ある田畝の中に湧く古來晝夜湧
 出すれども遂に浴室を構ふる人あらざりしに近年小松精
 一此地を開き深く泉源を探りて一泉を得又機關を設けて
 一泉を湧出せしめ共に浴室を構へて浴療に供す
 ○温泉性質 各所に湧出する温泉大小深淺各々其差あき
 に非ずと雖どもすべて清徹明淨にして臭氣なく其性分功
 用に至りては水湯を除くの外各泉大同小異皆其味ひ苦く
 且つ鹹ゆし蓋し此温泉は含鹽礦水にして其中多量の格魯

温泉性質

兒亞爾加里及び格魯兒士類少量の硫酸鹽類を含有せりと
 いふ其温度は湧出の時間に隨ひ又その泉管に隨ひて少差
 あきに非ずと雖ども大凡皆沸騰點以上に達せざるはあし
 嘗て司藥場に於て教師マルチン氏の分析せし所の定量表
 あり即ち左に出す

礦水一千立方センチメートル即ち一リートル中左の
 成分を含む

- 格魯兒曹胃母 三、七、九、〇、〇
- 格魯兒麻偲涅叟母 二、三、三、三、〇
- 格魯兒劍篤叟母 一、八、一、〇、〇
- 格魯兒加爾叟母 一、七、六、七、〇

硫酸石灰

〇、一九三〇

重碳酸石灰

〇、〇〇四二

重碳酸化鐵

〇、〇〇三一

珪酸

〇、〇一〇〇

第一格魯兒滿卷

痕跡

有機物

痕跡

貌魯繆剝篤叟母

同

貌魯繆曹胃母

同

總量一〇〇一〇三五蘭

○主治効用 古來諸家の説區々にして予の醫學に通ぜざる固より其何れに據るべきを知らざれども今且らくドク

主治効用

トルホフマン氏の説に依れば此温泉の主成分は食鹽にして格魯兒剝篤叟母。格魯兒麻偃涅叟母を少しく含めり其他の元素ハ甚だ少分に於て取て効用をあすに足らざれども今曾て久しく經驗せし歐洲中の温泉の尤も類似たる者に就き其主治効用を示さば少兒の腺病及び之より生ずる諸症風濕及び慢性の痛風患者の堪べき熱度に從て力の及ぶ的高度を要す大抵華氏の百四度列氏の三十三度也炎性滲出に於て其炎既に退くの後滲出物の吸収を催進す脈管外水液漏出及び通常の水腫に於て又吸収を催進するの効あり脚氣の水腫を兼る者皮膚の神經痛等は皆この泉に浴すべし又慢性胃傷風及び慢性下痢慢性の咽喉及び氣管支傷風慢性膀胱傷風慢性腔及び子宮傷風浴法及び陰門注射法を

並用す 膽管の慢性傷風、慢性の胃及び腸傷風より發する鬱
 憂症等にて殊に其運行怠慢および皮膚或は粘液膜の弛緩
 せしものには兼て此泉を飲料とするを要すと又近江の中
 島桑太氏の説に依れば慢性癩麻質斯癩癩脚氣麻痺病癩毒
 眼病子宮病皮膚病及び皮膚の衰弱に因りて發する所の諸
 病を治し又之を内服すれば緩軟下痢を起し胃の運營を進
 め飲食の消化を促がし肝脾及び腹間膜等の閉塞を疏通し
 兼て血脈の循環を健にすといふ釋惠頓の記行泉谷瓦に曰
 く試把草花竹葉浴熱湯則萎亦侵水一箋茶時則忽生色復本
 一浴者不復墜散と抑靈泉の徳また非情の植物に及ぶ歟
 ○浴法及び内服法 病症及び身軀強弱の差異あるに隨て

浴法及び
内服法

其温度及び入浴の度數時間等に差異あきを得ずと雖ども
 今且らくドクトルホフマン氏の説に依れば大凡温度は華
 氏の寒暖計九十八度より乃至百度即ち列氏の二十九度乃至三
 十度攝氏の三十七度乃至三
 十八を以て適宜とし毎日一回乃至二三回入浴し時間は十
 五六分より乃至三十分を以て適宜とすべし又これを
 内服する者は四号乃至十二号一号は我か七匁五分六厘五毛餘
 なれば一日の飲料凡そ一合五勺
 より乃至四五合までを一日の量とし毎日一二回これを服す
 但毎朝或ハ朝夕に於て單に之を用ひまたハ水を加へて之
 を飲むべしと浴後ハ速に衣服を着し決して直に外氣に觸
 れざるを要す浴者慎んで一時の小快を取り温泉浴治の效
 用を損する勿れ又浴客の切に注意を要すべきことわり即

ち俗に謂ゆる湯中これあり蓋し温泉論を案ずるに温泉の固より衝動鎮靜排泄等の種々の直接ある作用をあらはし又間接にハ専ら變質の効用あるものかれハ若誤て俄に多量を服し或は一時に數回入浴するときハ忽ち浴熱病湯即ちわりたを發し食欲減損衰弱過度脈行頻數皮膚乾燥發熱眩暈等の諸徴を來し又ブンドラシアセルリスと稱する浴疹を發することあり而して俗説に之を治病の効能をあらはすの初徴とあすもの多しと雖ども是れ決して然るに非ず故に若し此の如き證徴を認むるときハ且らく其入浴或ハ内服の數量を減し又數日間全く停止すべしと而して予この泉に浴すること數旬且つ諸浴客の經驗せし所を聞くに十

中の八九ハ皆この泉に浴すること兩三日にして飲食頻りに進み殊に渴を催ふすこと甚だしく而して凡そ一週間に過れば飲食の量はしめて本に復し病症ハ稍量きを加ふるに似たり故に俗説に曰ふ第一週間に病を出し第二週間に病を治し第三週間に疲勞を補ふとは是また此地數十百年來の經驗に係る所かれハ記して以て浴客の參考に供せざるべからず

湯戸

○湯戸

湯戸昔ハ客屋と稱し今井渡邊等二十七戸を限りその業を營みたりしが今ハ自由に官許を得て博く四來の浴客を宿泊せしむることを得る之を温泉宿と云ふ其數都て二十九

戸こ 此中昔時の客屋に志て今に存すま 即ち左に其名稱を列ぬ

大湯を算かにて引く浴舎ゆ之部

○今井半太夫

○眞誠社

○鱗屋

小澤湯兼引

○阪口屋

○富士屋

○植松

○鈴木屋

○山田屋

○露木

○相模屋

○新鈴木

○戸倉屋

自家の庭中ていに出泉浴舎い之部

○樋口

大湯及小澤湯兼引

○上杉

○尾張屋

○高砂屋

○阪本屋

○福島屋

○隱居玉屋

○中玉屋

○角玉屋

○榭屋

○釜成屋

○東屋

混同浴室

○伊勢屋

○米倉

○藤井

清左衛門湯を算かにて引く浴舎ゆ之部

○小林屋

○古屋

已上廿九戸

○混同浴室 村人之を義立して諸人をして随意に混浴せ

しむると四ヶ所即ち温泉寺の隠寮に一ヶ所温泉寺主の施

浴に係る小澤町新宿濱町各一ヶ所み其町内の協立に係

る其他各戸随意に算をわなし以て自家の用に供するもの

枚擧するに違わらず

○浴室 各戸二三室或ひは八九室々毎に概ね三槽を置き

一は熱湯を引き一は冷泉を貯へ一は冷熱調和して入浴の

浴室

用に供す又別に一槽を高處に置き底或は横に小口を開き
栓を用ゐて其開閉を自由にし以て局部の定まれる患者の
滴浴に備ふる者あり 近來樋口忠助屋後に一土窟を穿ち土中に含む
所の温氣を取て蒸湯となす又浴療の一法なる
しべ

旅人宿

○旅人宿 小川 濱松屋町 小澤 福井屋町 小倉 崎見町 最近の混同
浴室を用て旅客の混浴に供す

噓氣館

○噓氣館 大湯泉窟の傍側に沿て之を建つ故贈大相國岩
倉公噓氣の病患に奇効あるを察せられ官寮に相謀りて創
立せしめらるゝ所あり衛生局長長與專齋官内省三等出仕
肥田濱五郎諸氏専ら事に此に従ひ明治十八年二月始て其
館を開く噓氣場は其建築尤も壯麗にして場の中央に機關

を設け大湯沸騰の度毎に其蒸氣を場中に引き患者をして
其中に呼吸せしむ又浴室を構へ病症に従ひて兼て之に浴
せしむ館内に浴醫局あり浴醫長一人屬員數人を置いて各温
泉宿に在浴せる患者の來診を接し處方箋を與へ噓氣及び
浴療の方法等を指示す

又館内に温泉場取締詰處あり正副取締二名屬員數名を置
て温泉場改良事務其他すべて衛生上に關する諸務を辨理
する所とあす凡そ病患ありて熱海に到る者は必らず噓氣
館に往て診察を請ふを可とす然るときは能く其病症に應
じて浴療の適度を得べく且つ兼て服藥することを得べし
往て診察を請ふ者は金十錢以上を納むるを法とす歩行し

難き患者は温泉宿へ來診を請ふことを得べし浴醫長は毎
診金五拾錢代診は貳拾錢を納むるを法とす委きことは本
館受付掛へ往て之を問ひ且つ其規則を見て之を詳らかに
すべし

温泉宿

○温泉宿の浴客を接する唯其席及び寢食等の什器を貸す
のみ而して飲食其他すべて浴客の自辨に任す然れば浴客
各自の適宜に隨ひ或は手から飲食を調理し或ひは婢を雇
ふて之を辨ぜしむる隨意たり

席

○席は大小わり陋美ありまた浴客の望に任す席費一週間
金三四拾錢より乃至貳三圓の間たるべし席已に定まれば
食器茶具煙草盆等日用什器の類概ねみふ具ふ而して是等

の器具は別に其損料を收めず唯臥具は其品等に隨ひ一週
間金三四拾錢より乃至壹貳圓の損料を受く 文政十三年七月
山東庵京傳此地
に浴せしとき著したる熱海温泉圖彙によれば亭主より食事を賄へは
一まわり七日の食料一人前金百疋湯料として銀二匁つゝを定めとす
云々と見ゆ僅に五十餘年を 又温泉料として一日一人金一錢五
厘を納るを定とす

下婢

○下婢はすべて四十歳以上の老女にして朝に來り夕に歸
る能く万事に周旋して信實あり一週間金三拾錢を給する
を法とす

食料

○食料は米薪鹽味噌炭茶の類皆あらかしめ宿にて之を購
ひ置き浴客日用の需に應ず蓋し魚類を除くの外は一切の
物品みな之を他方に仰き山海の嶮を跋涉して齎らす所あり

山川名勝

○山川名勝

れハ其價もとより廉ならずと雖ども亦需用に欠るとあし
熱海の地もとより山水の美觀に富む近傍また名勝舊跡多
し記して以て浴客遊覽の便に供せざるべからずウアルト
ン氏曰く景色の變換も亦一二の疾病を治するの効あり例
へは僻閉症の患者都市を去りて閑謐の地に移り周圍の綠
陰ある山水の幽景を遍覽して遂に快治するが如しと山川
名勝の記あきと能はざる所以あり

上野山

○上野山 本町の北野中の湯のほとりより登る澡泉錄林
酒用箱の紀行前後二錄祭に曰く樵徑如線狐兔交跡披宿莽而上山
頂古松數株駢列其下坦夷可坐眼界爽豁右山左海聚落田疇

和田山

皆攢一指實爲富覽之區而委之草莽無有顧者豈人情尊遠賤
近抑地之顯晦亦有數耶と眞に然り

念佛山

○和田山 和田村の西南にあり禿にして立るものこれあ
り峻峻のほり易からず
○念佛山 和田山に連あり海に臨みて臥す興禪寺の東數
十歩の村路より登る登りて右に折るれば山頂に至る一望
すれば網代初島左右相臨み錦巖突兀として眼下に在り房
總相武の諸山遠く雲烟の如くに出没す還り下りて山盡る
所に至れば一茅屋わり之を魚見岬といふ常に一漁翁こゝ
に在り鱗族の來往を候ふて釣漁の便とあす亦絶景あり
○海水浴場 魚見岬の東北直下巖罅抱へ周りて潮水漸く

海水浴場

平穩ある處茶店を補理て諸客鑛泉入浴の餘慰亦攝養の一
斑に充つ

入山

○入山 和田山の西北に連り數峯あらび秀づ大幕小幕等
の名あり相傳ふ昔し右大將賴朝陣營を此山に張れり故に
名くと山腹に風神の祠あり

天神山

○天神山 入山の山脚にして和田水口二村の界に横はる
昔し菅公廟を建つ故に名く廟今濱町都松の舊跡あり伊豆
誌に古戦録を引て曰く僧正善祐熱海に在し時都を戀ひ手
から一本の松を植え其枝を都の方へ推し携しにいつとあ
く繁茂して三十歩に横はり枝葉悉く西にあびき待るも怪
しくわはれある話なりと今は其松も早や枯れて已に久し

丸山

○丸山 入山の麓に去て水口村の西北隅に在り周圍八九
丁團圓とえて鉢を覆ふに似たり頂上に秋葉神社あり傍一
亭を設て來客の馳眺を助く南面ハ高く石階を疊み西ハ寬
裕に土阪を墾けり

梅園

○梅園 丸山の西一丁にして又水口村の内字池代の地五
反餘去る十八年新に田林を開墾して園庭を作る長與專齋君の發見に係
り茂木惣兵衛氏の四望山壑を繞らし溪泉于曲して天趣幽邃加
るに人為の栽培亭梁の排置各其宜を得て歡心娛目の好遊
園とされり蓋今茂木氏の獻ずる所とありて御料地に囑す
と雖亦來偶者の入觀を許す園の側撫松庵あり過客の欸待
に供す

瀧溜池

○瀧溜池 上宿の北來の宮の側らに在り此地元來温泉に富を以て冷泉甚だ乏し亡友田中平八曾て屢々此地に遊び飲料水の人身に關する大なるを歎き金壹千五百圓を捐て新たに水道を鑿つて費に供し其工事を村民に謀る村民大に之を喜びて更に義金を醸出し日金山の麓より十五丁餘の樋を通し此に一大池を設けて冷泉を瀧溜せしめ更に寛を用ゐて之を村中に引く其水清冽まことに村民及び四來浴客の健康を助くるに足れり

横磯

○横磯 東町濱の東隅波止場を作りて小澳とす眺望奇にして亦海水浴游泳場となれり

絲川

○絲川 日金山の下より出で上流を官川と云ふ温泉寺の

初川

門前を過ぎ荒宿に至りて海に入る
○初川 上流を入川と云ふ鷹の巢山より出て丸山を繞り水口村を過て海に入る

和田川

○和田川 和田山より出づ此他皆細流都て南流して海に入る

業平井

○業平井 新宿の路傍に在り鈴秋峯の熱海地誌に曰く其業平之稱本據彼朝臣之咏歌也郷中男女朝夕互影于井水以爲婚姻之縁也今は斯る風習もあく又其水を汲用ゆる者もあく只石の井桁を置て其故蹟を存するのみ

那須澤の瀑

○那須澤の瀑布 丸山の北數丁幽溪窮る處に在り近年好事の人榛莽を開き花木を植え一遊觀場となさんと欲する

錦浦

の企圖あり他日必らず浴客遊覽の佳境とあるべし
 ○錦浦 念佛山の麓を廻り海岸すべて錦浦と稱す蓋し錦
 巖の靈區あるを以て此名を得たり魚見岬より錦巖に至る
 海路幾んど半里海岸みち石壁奇秀岸下に蒼磐石兜岩烏帽
 子岩等あり皆その形を以て名く雀島には群雀噪ぎ馬背は
 亦た形を以て名く舟を進めて馬背をめぐり西に折れば巖
 腹空洞石門をあす之を狗寶といふ又折れて一大石門を得
 る胎内くゞりと稱す小舟を容るべし其巖角を雹石といふ
 紋理氷裂迸しり落んとす其次は則ち錦巖あり絶壁數仞下
 に巨洞あり洞中衆石五色錯雜して朝曦に映すれば燦爛錦
 の如し岩頂の老松みち根を石に挿さみ雜卉黃翠其間を彌

日金山

縫し眞に奇觀なり其西石壁ますく峻し洞あり觀音窟と
 云ふ其門甚だ窄ま退潮の時を待て此に入れば洞中や、濶
 く且つ甚だ遠く古來其奥を窮めたる者あしと云ふ一小池
 あり清泉掬すべし池を隔て、巖上に觀音の石像を安置す
 承應年間に日蓮宗の僧某氏の建る所といふ洞中石乳あり
 又白蝙蝠多し境靈にして久く居るべからず此邊すべて曾
 我濱といふ故に亦曾我の窟とも稱すといふ以上熱海村の
山水に係る
 ○日金山 伊豆山村に屬す其絶頂を丸山と稱し又十國峠
 といふ熱海村より登るものは路を上宿の北來の宮の東に
 取る登ること十町石浮屠數基あり四面塔と云ふ昔し大僧
 正真然此に住せりと僧正は空海
海の法嗣是より右に折て登る一町毎に

石地藏を安じ下に町敷を記せり登ること十一町四面塔より算ふ下同
 戸澤地藏堂とす泉隣大徳の開創に係る大徳また空海の徒在家僧あり
 之を守る今堂宇荒廢觀るべからず是より路傍さらに雜木の目にさへぎるかく羊腸屈曲雲を踏て登る登て四十町に至れば日金地藏堂あり此山仁徳天皇の御宇松葉仙人といふもの開創すと云ふ地藏堂何の代に建立せしを詳らかにせず相傳ふ鎌倉の右大將之を中興し且つ田祿を附せりと頼朝朝府を定めしより常に此山に登ること能はざるを憾み府下今安に遙拜所を置て日金地藏堂と稱せり舊跡今尙ほ鎌倉に存せりと置する所の銅像は貞享中般若院聖算の造る所脇士二童子は傳へて空海の作といふ堂前に閻王及び生死河婆の石像あり古削觀るに足る守者在家僧もと六坊あり今ハ源秀坊

道正坊等四箇のみ相傳ふ箱根の山賊般若院の僧某に化せられ得度して此に住せりと堂後に仙人塚あり即ち開基松葉二世欄脫三世金地三仙人の墳墓ありといふ是より更に登ること八町熱海より通計五十八町丸山の絶頂とす即ち十國峠あり石あり左の文を刻す曰く伊豆國加茂郡日金山頂所觀望者十國五島自子至卯相模國武藏國安房國上總國下總國自辰至申其國所隸之五箇島及遠江國自酉至亥駿河國信濃國甲斐國天明三年東都林居士諸鳥出雲光英源清侯等應熱海里長渡邊房求之需建之と讀了りて頭を回らし望一望すれば四眺洞達一翳の眼を遮るかく西の方富士山高く天半に秀で箱根足柄その北に連あり甲斐信濃の諸山其間に出没し愛

鷹山は其左に峙ち三島沼津の諸村砦の如く其麓に布く官道の松富士川の流遠近斷續駿河の海濱に沿ふ正面は重寺の灣を隔て眞城天城諸山を望み更に頭を東方に回らせは豆海相洋水天相接し熱海網代伊豆山眞鶴初島の諸勝近く肩間にあつまり五島大島利島等及び房總諸山は遠く雲烟の如く隠現し三浦江島大磯等其間に點綴して景趣を添ふ謂ゆる目不周玩情不給賞もの眞に海内の絶觀あり予明治十一年五月松平

確堂公と俱に登る其九月亡友成島柳北また登る柳北曰く斯山之を駒岳擊嶽鞍懸の諸山に比すれば甚た低し然れども一峯海隅に突起し三面に峯巒の之を對峙する者なく馳眺千里眼中に一此遊老幼婦女の遮蔽あるを見ず是れ壯觀の諸山に冠たる所以也

如きは竹輿を僦ふて乗るも可なり價金七八十錢あるべし然れども夏日に毒虫多く又雨中には山蛭多くして往々人

伊豆山

を書すと云ふ宜く心を用ゆべきなり

○伊豆山 伊豆神社の境内あり社もと關東惣鎮守と稱し古來朝野の尊崇篤く別當般若院は走湯山東明寺と稱し三千の支坊を領し天台眞言二宗を兼ね上下兩社に奉仕せり

東鏡脱漏に伊豆神社の七堂伽藍焼失し一晝夜の間 中古以來漸やく炎煙天を焦せることを記せり其壯大おもふべし

衰頽を極むと雖ども尙ほ社領三百石を領し社僧十二坊を存し堂宇時々官費を以て修繕せられたりしが維新以來祿を失ひ坊を廢し且つ火災に罹りたれば上の宮のみ僅に其趣を存し下の宮は舊墟もまた求めがたきに至り嘗て鎌倉の右大臣が千早振伊豆の御山の玉椿八百萬代もいろはかはらじ續後遷集と詠せられたること今は虚言に屬せしが如し

此邊すべて古々井の森と稱し時鳥の古歌多し其の一二を
録さは拾遺集に清原元輔の歌とて思ひやるこゝの森の
事にはよそある人の袖もぬれけり」とあり後拾遺集に藤原
兼房が五月關こゝの森のほとゝぎす人しれずのみ鳴わ
たるかゝ同じく大貳の三位が返しに時鳥こゝの森に鳴
くこゝを聞よそ人の袖もぬれけり扶木集に惠慶法師の「人
の親のおもふ心やいかならんこゝの森の秋の夕暮等あ
り社前の石階を下ること數百級にして海岸に出れば温泉
あり即ち走湯あり又古歌多し江島屋相模屋等の湯戸三四
軒みお浴室に温泉の小瀑を設く清爽浴すべし此地熱海村
を去る東北十八町即ち小田原驛の街道にわたる近時神社

網代港

の傍眺望佳絶にして稍平坦ある處を卜して東京の或有志
の人一の遊園を開墾せり又社壇正門の北鳴澤の瀧に沿て
車道を鑿拓し工事將に成らんとす最詣拜の便宜に當りて
一大美事と謂ふ可し
○網代港 熱海村の南海路二里また多賀村を経て陸行す
べし即ち下田港に至るの街道あり然れども遊覽の客は舟
行を宜しとす舟路は則ち錦浦を回り曾我濱を経て港に達
す港民戸四百餘船舶多く繋る東南山を越て根越の觀音堂
に至る曹洞宗長谷寺と稱す門前の觀望また極めて奇絶あ
り本尊 大和豊山の本尊と同一もと山下の巖窟にあり時々暴潮の
爲に漂はさる僧實參之を憂ひ此寺を創建して此に遷せり

と云ふ

初島

○初島 熱海を去る海路三里東西七八町南北四五町額九
十三石三の一孤島にして鎌倉の右大臣か箱根路を我越く
斗五升れは伊豆の海や沖の小島に浪のよる見ゆと詠せられたる
沖の小島とは是なり民戸四十餘多くは漁獵を以て業とな
す島の西隅に初木神社あり木花香初木姫を祭る此の姫初
めて伊豆山の走湯を見出したまへりと云ふ石華表及び石
燈籠あり享保元祿年間の建立に係る又曹洞宗の梵刹二字
あり一を東明寺と云ふ島の東隅松樟鬱鬱の間に在り一を
慈福寺と云ふ初木神社の南隣石階數級の上に在り俱に網
代村禪修院の末寺に屬す此島到る處水仙花多し花葉長大

鷓鴣石

一杯水

頗る目を駭かす又桃樹多し産物は茶麥桃實薩摩芋等あり
○鷓鴣石 三島驛に至る街道の南十數町の地に在り田方
郡丹那村に屬す熱海を去る凡そ三里餘石の高さ一丈六尺
餘横六尺餘にして人語其他一切の音聲この石に響くこと
聲響の間一毫を容れず竹溪の記竹溪西原彰明和中に記する所の文一篇ありに曰く
冷間記所稱南嶽响嘯峰之響石者歟と近來野火の災に罹り
大に其響を減ぜりといふ
○一杯水 多賀村の地にて下田街道の傍にあり僅に尺餘
の小泉あれども清く且つ冷あること水晶の如し相傳ふ右
大將頼朝この地を過りしとき渴に臨て之を掬せりと此他
駒形堂頼朝の馬を産立峰山頂に銚子口鬢の澤
みち地蔵堂あり
在家僧之を守る

等數多の舊跡あれども今悉くハ記さず

○社寺 并御用邸

此地昔は伊豆神社の社領たり故に嘗て般若院の盛んなるや三千の支坊多くはこの邊に散在し隨て種々の神社もまた多し是れ此小村にして社寺の數甚た多き所以あり

湯前神社

○湯前神社 上町にあり天平勝寶中少彦名尊を祭るの祭神

近來異論ありといふ然れども予の固より神祇の事を世々石渡氏神事を掌どる社前に石碑あり本社の來歴を畧記す文ハ信陽源通魏の撰にして書ハ江戸の東江源麟と見ゆ明和七年九月石渡親由の建る所あり石華表及ひ石燈籠二基とも寶曆安永の頃久留米侯の寄附する所あり

來宮

○來宮 上宿の北にあり五十猛尊を祭る熱海村の鎮守なり和銅三年の創立に係るといふ境内に大豫樟樹二株ありもど七株あり 大さ凡十五六圍中身空洞にして數人を容るべし

和田八幡

○和田八幡 錦浦の西端和田磯にあり傳へて源頼家の信仰する所とあす今僅に其舊墟を存す

今宮

○今宮 天神山の南にあり事代主尊を祭る和田村の鎮守たり老樹群立清陰蒼々たり

天神祠

○天神祠 濱町の東にあり菅公を祭る相傳ふ菅公築紫に諱居せらるゝ日自から肖像七軀を刻みたまふ本祠祭る所その一ありと祠もと和田の天神山にあり近古以來今の地

本紀の柿の社の

に遷す内田氏神事を管す
 ○紀の柿の本の社 横町御成橋の南に在り柿の本の紀僧
 正を祭る里俗相傳ふ紀僧正眞濟嘗て染殿後の事に坐せら
 れて此に謫居し終に死せりと此傳甚た誤れり僧史を按ず
 るに釋眞濟は山城の人彈正大弼紀の御園の子にして弘法
 大師十大弟子の一あり承和中勅を奉じて入唐し歸朝して
 東寺の長者に任じ又僧正とあり貞觀二年二月廿五日高尾
 神護寺に遷化すといふ本朝高僧傳の論に曰く世人傳曰眞
 濟惑色而成魔焉余常疑之略閱眞言傳所引善家秘記始決疑
 矣曰金峯山比丘咒藤后之病見其容顏愛慕而作鬼魅入張中
 夫清行時之鴻儒而見聞不誤其不關濟公必矣云々と此說以

温泉寺

て謬傳を正すに足る而して未だ此地何に由て此僧正を祭
 るかを詳らかにせず紀の博昭の事より轉訛又濱町天神祠の境
 内にある一石を傳へて染殿後の陵墓とあすが如きに至り
 てはその傳會の甚だしき固より論ずるに足るものなし
 ○温泉寺 清水山と稱し新宿にあり臨濟宗妙心寺末なり
 勅謚神光寂照禪師圓鑑國師授翁宗弼和尚の開創に係る和
 尚は万里小路中納言藤房卿あり僧史を按するに卿は亞相
 宣房の子嘗て禪學を喜び退朝の暇にハ明極俊及ひ大燈國
 師に參ず建武元年潛に遁れて北岩倉に至り出家す時に年
 三十八延元中關山國師妙心寺を開くに當り往て法脈を傳
 へ遂に妙心第二祖とあり天授六年三月廿八日端坐して化

す時年八十五萬治二年秋勅謚して神光寂照禪師と曰ふ明
 治十二年十一月更に勅して圓鑑國師の號を賜ふ和尚の未だ出家せざる
 後醍醐天皇に仕へて力を中興に盡されしこと和尙の傳衣紹金の
 已に世人周知する所なれりことに贅せず
 七條一肩あり寺の什寶とあす近年福岡孝悌君藤房卿の塑像一軀を寄附す又吉井友實君寄附する所
 の畫像一幅あり俱に官服の上に又中興雲居國師の九條衣及び
 法衣を著し古雅幽致愛觀すへし
 念珠を藏す雲居の傳は興禪門頭に古松一株あり幽翠人を襲
 ふ傳へて開祖の手植とあす諸家の詠歌詩庭前に開祖の碑を
 建つ銘并に序は京都知恩院徹定上人の撰にて篆額は大相
 國三條梨堂公書は予の惡筆なり碑陰に二文を勒す一は増
 上寺行誠上人一は亡友成島柳北なり此碑初め明治十一年に建つ翌年震災に罹て顛碎す
 同十七年春贈大相國岩倉公之を借て再建の事を成島柳北田中平八二
 人に屬す二人又予に謀る乃ち三人協力して之を再建す其資は悉皆平

興禪寺

八之と出す然るに刻成て建るの日は岩倉公既に薨じ柳北平八門前
 二人また逝き予一人のこれり誠に今昔の感に堪えざるなり
 に古井あり三點水と名く蓋し唐の悟達が靈水を三點して
 奇疾を治せしといふ故事に依り雲居の命ずる所に於て熱
 海第一の甘泉ありといふ支坊慈照庵上宿にあり俗に湯河
 原堂と稱し本尊地藏大士を安ず相傳ふ治承年間右大將賴
 朝の開創に係ると延寶二年江戸の人久保田某また堂宇を
 興す而して今の堂は安政中温泉寺主雪源其檀越石渡喜右
 衛門等の諸氏と謀りて建る所あり平澤悌侯か撰する所の温泉寺記一篇あり本寺に藏せり
 ○興禪寺 和田村念佛山の麓にあり海岸山と稱す温泉寺
 と同じく圓鑑國師の開創に係る寛永年間雲居國師中興す
 雲居國師年譜を按ずるに師諱は希膺土佐の人十五歳にし

て出家し法を一宙和尚に嗣ぐ元和元年塙直之の爲に大坂城に屯し死を決す東照公の容を得て妙心第一座とあり又諸方を歴住し寛永七年の春遁れて熱海に至り興禪温泉二寺を中興す同じく十一年元和法皇の勅請に應じ奏對旨に愜ふ十三年仙臺中納言政宗の請に應じて松島瑞巖寺を中興す承應三年後光明天皇勅して慈光不昧禪師の號を賜ふ萬治二年八月八日端坐して化す壽八十八享保十九年六月特に勅して大悲圓滿國師と謚し賜ふ國師生涯諸方を巡化し山を開き寺を興すもの總て百七十三ヶ所に及ぶといふ惜むべし當寺は火災に罹り開祖及び中祖の遺物多く焼亡す然れども尙ほ本尊十一面觀音長三寸ハ藤房入道

海藏寺

醫王寺

の護念佛に係り又雲居の法衣及び自贊の畫像等あり支坊延命庵神光庵みる僅に舊墟を見る平澤佛侯の記によれば當寺あり大さ牛を蔽ふべしと見ゆ而して今は焼たり又入道遺愛の鞍及び念珠等も焼け雲居國師手植の松も今は枯たり
 ○海藏寺 又妙心寺末にて水口村にあり佛徳廣通國師を開祖とし悟庵潛溪二師を中興とすみる其時代を詳かにせず境域瀟灑遊觀するに堪へたり
 ○醫王寺 善逝山と稱し昔は仲町今樋口忠助の宅地これなりにあり明治十四年本里の北大久保の山腹に移す舊時ハ眞言宗にして伊豆山の末寺あり慶長十八年播楊大教禪師物外和尚中興し妙心寺末とある相摸の早雲寺に藏する北條早雲手記の簿札中に相州熱海醫王寺云々の語あり之に依て之を觀れば此寺當時已に臨濟宗にして早雲寺の末に屬せしを知るべく又熱海村の地嘗て相摸に屬せしことあるを徵すべしと雖ども今皆其記を得ず惜

むべし境内に太田駒千代の墓あり駒千代は左衛門尉道灌
となす境にして舊掛川侯の祖新六郎重正の兄あり永祿七年
の玄孫にして舊掛川侯の祖新六郎重正の兄あり永祿七年
八月當寺の境内に自殺す時年僅に十四歳ありしと云ふ又
峨山竹院二師の墓あり竹院は鎌倉圓覺寺に住し峨山は東
京麟祥院の中祖と稱し俱に一時の高僧ありと云ふ明治十
四年本寺と俱に之を大久保の地に移す

潮音寺

○潮音寺 もと和田村に在り妙心寺の末ありしが近年廢
絶して其跡もまた求め難し

大乘寺

○大乘寺 本町湯前社の上にあり通廣山と稱し日蓮宗三
島驛本覺寺末あり此寺もと眞言の道場なりしに弘長二年
の春日興上人日蓮法嗣 六人の一來り住僧行滿を化度し衣を更へ宗を

轉せしむ此に於て行滿名を日行と改め興を請して開祖と
し自ら第二世に居れり時に日蓮上人當國伊東に謫居せら
れ此盛事を聞き嘗て四十二歳の容貌を水鏡に寫し自から
刻みたる所の肖像を興に附與し當寺に安置せしめらる今
本尊前に安置するもの是なり又日蓮弘安の歳 月を記す日新文明の歳 月を記す
二師の書せし曼荼羅を藏す本堂の後直に登る石階數十級
七面祠あり眺望極めて佳し境内に朝川默翁の墓あり門前に
其子善庵が建る所の碑あり文は龜田鵬齋書は大窪天民篆
額は増山河州あり梵鐘あり文化年間鑄る所といふ
○誓欣院 法界山と稱し上宿にあり昔は眞言宗にて道光
寺と稱す天正の頃淨土宗僧善譽誓欣上人來り中興して明

誓欣院

珠庵といふ後に村民その徳を慕ふて誓欣院と呼びしとぞ
今は東京増上寺の末どある寛政年中住僧聽察村長今井半
太夫に謀り寺を今の地に移しもと湯前社の東京蟠龍寺知本
律師を請す本これを長泉院の徳門普寂和尚に譲り始めて
律場とさし寺域を結界す本尊阿彌陀佛相傳ふ恵心僧都の
作にして千葉常胤の持念佛ありしと隸する所の觀音堂荒
宿にありもと觀音の銅像百鉢を安ず昔は隨江亭と稱し又隨心庵と曰ふ蓋し僧隨心の開創に係るを以てなり竹洞の隨心庵記一篇扶桑名賢文集に見ゆと云へり予未た之を檢せず近年屢々火災に罹り今僅に數軀を存すといふ

御用邸

○御用邸 新宿の南新横町に在り明治廿一年新に造營の功を竣せらる此地舊御殿地と稱す伊豆誌に曰猷廟徳川三代將軍家光

温泉に浴せんと欲し玉ひ寛永三年佐久間氏に命じて之を營せしむ既に成る適々事ありて台駕遂に臨ます後令して毀たしむ是より先き慶長九年三月神祖五郎太丸義利長福丸頼宣を携へられ京に上り玉ふ時熱海を經過し温泉に浴したまふこと一七日猷廟この例を追ひ玉ひしにやと當時造營に關せし圖書類渡邊氏に藏せりといふ予内田氏が藏せる寫本に就て之を見たり其地五反餘熱海村の中央にありたり平坦にして眺望殊に佳絶あり而るに今また壯觀の高樓を建營し皇室の御用邸とささせられたれば風色さらに光彩を添て土地いよ、潤澤を増せり西北老樹列あり茂り其外に溝を回らせし跡あり此邊里俗堀と稱す俱に宮内省の御用地となる

産物

熱海の地甚だ狹隘三方山を回らせども皆秃峯一方海を開
 けとも僅に釣漁に止まり田園耕作の地は乏し況んや爾
 餘の物品を産生するの餘地あらんや蓋し日工集を按ずる
 に曰く應安七年二月十七日爲湯醫往熱海中余乃次其韻題
 温泉廣濟接待庵接待庵の事蹟詳らかならず或人曰く今
 の温泉寺是ならんと蓋し或ひは然らん曰温泉亂
 浴汗淋浪接待知消機杓湯病客每分熬店榻詩人偏愛贊公房
 陶成什器輕於土煮出官鹽白似霜暫借僧窓同遠眺東南目斷
 水茫茫此詩五六の句にいふ所に依は五百餘年前この地
 に於て磁器を製し且つ鹽を産せしこと明かあり因て之を
 古老に問ふに昔し阪町の上二軒茶屋に於て盛んに磁器を

樟材什器

製し又今の横磯と稱する邊みか鹽田ありし又鹽釜と稱する處あり
 に磁器を製する者は何の頃よりか其人なく鹽田は皆暴潮
 に奪ひ去られたり近來内田氏これを興さんと欲し種々に
 力を盡したれども遂に未だ其功を果さずと甚だ惜むべし
 とあす而して今製産する所のものは僅に樟材什器雁皮紙
 壁土等の兩三種に過ぎ
 ○樟材什器 材料ハ多く天城箱根諸山より出づ製する所
 の器具頗ふる多し中に就く筆筒書棚書物箱用書筆筒針
 箱煙草盆廣蓋机火鉢等ハ尤も有用の具なり其他玩弄に屬
 すもの數多あれども悉くハ記さず而して之を製するもの
 及ひ之を鬻ぎ賣る者亦十數家あり中に就く古來其業をさ

雁皮紙

かんに營なみ今なほ益々怠たらざる者ハ遠州屋庄右衛門丸屋喜平福田屋安二郎等ありといふ各家また轆轤製のもの塗物類等を併せ賣る又青木および柵にて製したる箸數種あり何れも浴客滞在中の需に應じ何様にも製すべし

○雁皮紙 地棉を用ひて之を抄く地棉ハ和名をカゴと云ひ俗にガンピと稱す木ハ櫻に似て四月葉を生ず此木處々の山間に生すれども十年を経されバ用をなさず故に三又楮を雜へて之を抄き唯薄葉と稱するものは純一の地棉を用ゆといふ熱海におゐて此紙を製し初めたるは柴野栗山の創意に出で今井半太夫箋齋また徳翁と稱せし人あり此業を起し江戸本町へ肆を開き又金花堂榛原等へ分ちて之を發賣せり爾來

壁土

この業を營むもの漸く多く殊に方今ハ今井半太夫渡邊彦左衛門井上彦八神角善吉芥川由五郎等専ら力を此に盡すといふ

○壁土 熱海の地山溪田園到る處往々この土を生ず青黄赤白その他の間色凡そ十七種ありみお壁を塗りて美しく且つ堅し中に就く金色及ひ銀色のものあり光彩燦爛官室の美觀を添ふに足る年來山田万吉吉田屋と稱すといふもの此土を賣るを以て業とふし常に東京その他へ運輸するもの甚だ夥多といふ○この他赤石脂薬用に供すべし○鹽温石鑛泉中に含む所の加爾基曹達等凝結して自然に石の如くなりしもの○煉瓦石近年此業を創む○乾魚等の賣品あれども其品少或ハ尋常のものなれハ敢て記さず

熱海獨案內(終)

明治十八年九月十二日板權免許
同 年九月出版
明治廿二年十二月二日改正增補御厨印刷出版

定價金貳拾五錢

編輯者 東京府平民 大内青巒
麻布北日下窪町二番地

發行 靜岡縣士族 逸見久五郎
東京京橋區元數寄屋町十番地

發兌元 東京 鴻盟社
麻布區麻布北日下窪町二番地

賣 東京日本橋通三丁目 小林新兵衛
所 豆州熱海東町 小林屋棟造
温泉宿

終

